

○月曜～金曜 午後 6時30分

○土曜 あさ 9時30分

RKK ニュース  
キックオフ



響け！くまもと

週刊 山崎くん  
RKK 45th

ラオ 月曜午後 4時20分

侍と  
民話

○火曜 よる 8時

○土曜 午前 11時15分 (再)日曜あさ7時15分

熊本放送

第40回  
熊本県芸術祭参加

ベートーヴェン

第九

第16回

平成10年12月20日(日)午後6時30分

熊本県立劇場コンサートホール

主催/熊本県民第九の会・熊本県文化協会

助成/熊本県・(財)熊本県立劇場



熊本県知事  
福島 讓 二

祝 辞

第16回ベートーヴェン「第九」演奏会の開催を心からお喜び申し上げます。

熊本県民第九の会は、県立劇場の完成を機に昭和57年に創立されました。公募により編成された合唱団と熊本交響楽団による「第九」の演奏会は、回を重ねるごとに充実し、今や熊本の一年を締めくくる恒例の行事としてすっかり定着しています。これも偏に林原実行委員長をはじめ熊本県民第九の会の皆様方の御協力の賜物であると深く敬意を表します。

出演される皆様は、10代の高校生から80代の御高齢の方まで実に幅広い年齢層の方々がお集まりだと伺っております。また、合唱団への参加は初めてという方もたくさんいらっしゃると思います。お仕事や勉強の合間をぬって、8月の結団式以来限られた時間の中で、なごやかさの中にも緊張感のある練習を重ねられ、今日の日を迎えられました。

銀行の倒産や失業者の増加、あるいは青少年の非行といった暗い話題ばかりが目立つ昨今です。また、ものの豊かさより心の豊かさが求められている時代でもあります。皆様のこのような活動こそが、明るい未来を切り開く一つのモデルであると感じております。一つの目標に向かって練習を重ねてこられた成果が、素晴らしいハーモニーとなって新しい年の扉をたたくとともに、多くの県民の方々に感動と励ましを与えるものになることを期待しております。

最後に、今回の「第九」演奏会の御盛会と皆様方の益々の御活躍、御発展をお祈りいたしましてお祝いの御挨拶いたします。



熊本県立劇場館長  
魚住 汎 輝

ご挨拶

熊本県立劇場コンサートホールに「県民第九の会」の歓喜の歌声が響き渡るのも、はや16回を数えるまでになりました。ホール一杯に響き渡った「県民第九の会」の歌声は、私たちの心に深く刻み込まれ、今年も木枯らしが冬を告げる頃になると、一年を締めくくり新しい年を迎える歌として、再び、心の中に鮮やかに思い起こされます。

今や師走の風物詩として熊本に欠かせないものとなっている「第九」です。出演される熊本交響楽団や合唱団、ソリストなど400人にのぼる方々は、お忙しい仕事の合間をぬって練習を重ね、お互いの絆を深め、心を一にしてこられました。今年も大変なご苦労があったかと思えます。「県民第九の会」の皆様や関係各位のご熱意、ご努力に対しまして心から敬意を表します。

1998年もまもなく幕を下ろそうとしています。今年は、銀行の倒産や毒物事件等、暗く重苦しい事件が多い年でしたが、一方、向井千秋さんがスペースシャトルによる二度目の宇宙飛行に飛び立つなど明るい話題もありました。

皆様におかれても様々な1年であったことと思いますが、シラーの詩にも「歓喜は人々を一つにする」とあります。本日のご盛会をお慶びしますと共に、歓喜の歌声が、新しい年を明るく希望に満ち溢れたものとしてくれるよう県民の皆様と共に祈念しまして、ご挨拶いたします。



熊本県文化協会会長  
三浦 洋 一

鼓舞する歌声

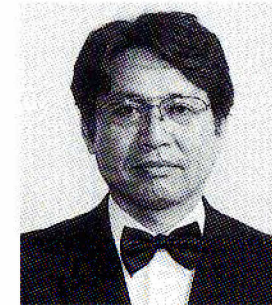
県民第九の会の第16回公演を心からお慶び申し上げます。

先頃、アメリカ映画界の大きな授賞式のイベントのニュースで、ベートーヴェンの第九の一節が流れていました。ほんの僅かな時間でしたが、喜びや昂ぶりをあらわす曲としてアメリカの人も私どもと変わらぬ愛着をもっていることがわかりました。

話が邦楽のことになりますが、去る10月25日に第4回全国邦楽コンクールが開催されました。特別演奏会では箏の吉村七重、尺八の三橋貴風の共演で現代邦楽の溢れるような威情表現を楽しむことができました。

邦楽のレパートリーが想像以上に広がっていることに一驚しましたが、洋楽のように論理的に積みあげた喜びの表現とは別ものでした。ほとんど伏線もない端的な表現が、いかにも日本の民族性を物語っているようでした。

複雑・綿密に構成された第九は、それだけに爆発的な歓喜を全身で享受することができます。今年も県民第九の会の歌声が聴衆を鼓舞し、熊本の明日を明るく照らして下さることを心から祈念いたします。



熊本県民第九の会実行委員長  
林原 隆 治

ご挨拶

ご来場、誠にありがとうございます。本日ここに第16回目の「第九」演奏会を開催することが出来ますのも皆様のご支援ご鞭撻の賜と心より感謝申し上げます。

今回は指揮者に熊本交響楽団がサン・アントニオ市で友好演奏会を開きました際にお願ひしました新進気鋭の井崎正浩氏、ソリストには県出身でオーストラリアでご研鑽の後、ご活躍中の佐々木典子さんをはじめ三名の実力派の先生方をお迎えすることが出来ました。

合唱団は約三百名の方々八月から練習をはじめ、工藤勇壹先生、松岡聡先生のご指導によって順調に仕上がってまいりました。実行委員会では、熊響も含めると大きな組織となりますので慎重な運営を心がけて参りましたが何か不満な点もあつたかと思ひます。曲の中の詩人シラーの歌詞に「喜びの翼の元ですべての者は同胞となる」という言葉があります。熊本で毎年県民第九を聞いて頂ける喜び、演奏できる喜びが大きな喜びの翼となることを願っております。

末筆になりましたが、本公演に際し、熊本県及び熊本県立劇場、並びに熊本県文化協会より助成を頂きましたことを深く御礼申し上げます。

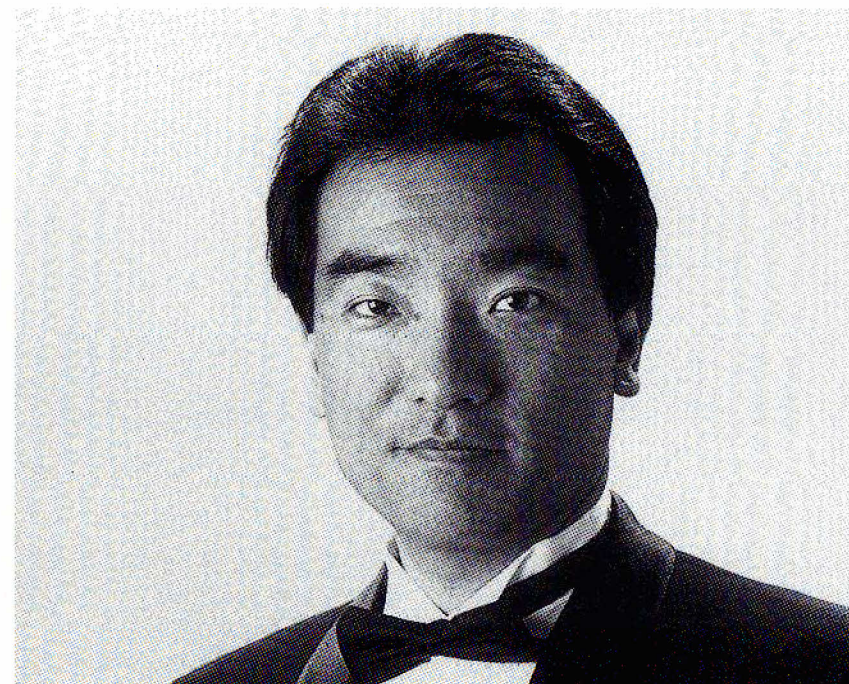
出 演  
PERFORMANCE

指揮 井崎正浩  
独唱 ソプラノ 佐々木典子  
メゾ・ソプラノ 岩森美里  
テノール 井ノ上 了吏  
バリトン 瀬戸口 浩  
合唱 熊本県民第九の会合唱団  
合唱指揮 林原隆治  
工藤勇壹  
松岡 聡  
ピアノ 古閑恵美  
眞田眞澄  
浜田志貴  
管弦楽 熊本交響楽団



平成9年12月21日(日) 《第15回熊本県民第九の会演奏会(指揮=金 洪才)から

指揮者のプロフィール  
CONDUCTOR ; PROFILE



指揮 井崎正浩 (MASAHIRO IZAKI)

1995年第8回ブタベスト国際指揮者コンクールで優勝。コンクール中の演奏をハンガリー国立オペレッタ劇場総裁に認められ、同年11月同劇場でレハール《メリー・ウイドウ》を指揮、従来の伝統を踏まえた上での新鮮な音楽創りに聴衆だけでなく演奏者の圧倒的支持を受け大成功をおさめ、センセーショナルなデビューを飾る。1996年1月同劇場初来日公演にも指揮者の一人として同行、凱旋公演での手腕は「音楽の友」コンサート・ベストテン'96に選ばれるなど高い評価を得た。'97に選ばれ、2年連続の快挙を成し遂げた。

ハンガリーにおいてはこれまでに、ハンガリー国立交響楽団、ハンガリー国立放送交響楽団(ブタベスト交響楽団)、ハンガリー国立歌劇場管弦楽団(ブタベスト・フィル)、MAV(マーヴ)交響楽団、セグド交響楽団等の主要オーケストラを指揮し、どれもが高い評価を受けている。加えて特筆すべきはこれまでのハンガリー国内での演奏の全てが国营テレビ・ラジオで中継あるいは放送されており、現在ではハンガリーで最もよく知られた日本人のひとりとなっている。1998年はマターヴ交響楽団への客演、9月からのサヴァリア交響楽団の常任指揮者への就任が予定されている。

またハンガリー国立オペレッタ劇場で共演した歌手たちの熱い要望によりCD録音の指揮者に抜擢され、ミュンヘス・ハース社(ハンガリー)と契約、第一弾としてカールマン《サーカス・プリンセス》が1996年夏リリース。また1997年秋にドイツ・ツアーを指揮したハンガリー・スター・オペレッタ劇場合唱団及びハンガリー国立歌劇場管弦楽団とのレハール《ジプシーの恋》がひきつづいてリリースされている。

日本では1996年1月に東京シティ・フィルのニューイヤーコンサートのデビューを皮切りに、読売日本交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団、群馬交響楽団等に客演。また声楽を専攻した特技を生かしオペラやオペレッタ公演にも積極的に取り組む一方、合唱指揮者としても日本フィルハーモニー協会合唱団の常任指揮者を務めるなど幅広い活動を行っている。今後も日本、ハンガリー国内での多くのオーケストラへの客演やルーマニア、スイスの劇場デビューを控え、これからの活躍にも大きな期待が集まっている。

指揮法を安永武一郎、故カール・エスターライヒャー、ギュンター・トイリング、湯浅勇治、遠藤雅古、伊藤栄一の名氏に師事。福岡教育大学音楽科卒業、東京学芸大学大学院(作曲・指揮法講座)修了、オーストリア国立ウィーン音楽大学(オーケストラ指揮科・合唱指揮科・作曲科)留学。

佐々木 典子(ささき のりこ)  
ソプラノ



熊本県出身。武蔵野音大卒業。ザルツブルグモーツァルテウムに留学。同大学オペラ科を主席で卒業。1984年ウィーン国立歌劇場オペラ研修所に所属。1986年ウィーン国立歌劇場にソリストとして本契約。1990年熊本県女性賞を授与、1991年フリーとなる。

ザルツブルグ「若人の情景」の「ドン・ジョヴァンニ」(ガッツァニーガ)のドンナ・アンナとマトゥリーナ役で出演したほか、ザルツブルグ宮廷歌劇場の「ジャンニ・スキッキ」でのラウレッタ役、ヘルシンキ、ストックホルムなどで現代曲コンサートに出演。オーストリア、ドイツでは「交響曲第4番、子供の不思議な角笛」(マラー)などの演奏会に出演。またフォルクスオパーの「ドン・ジョヴァンニ」をはじめ、1986年、89年ウィーン国立歌劇場日本公演、1987年、88年ザルツブルグ音楽祭などに、また1989年のウィーン国立歌劇場日本公演ガラコンサート(クラウディオ・アッパード指揮)に出演。その他数多くの演奏会に出演した。

レコード、CD、LDなどの録音も多数あり、東京、熊本、NHK・FMなどでのリサイタルに出演。最近の演奏会では95年の「ハ短調ミサ」(モーツァルト)、金沢アンサンブル定期演奏会、「ラヴィ・パリジェンヌ」(オフエンバック)など、96年には「三人姉妹の家」(シュベルト)や、音楽議員連盟主催の「芸術文化の夕べ」などの出演がある。

現在、武蔵野音大、作陽音大講師、二期会会員。

岩 森 美 里(いわもり みさと)  
メゾ・ソプラノ



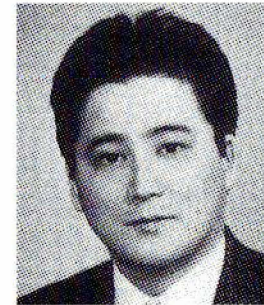
国立音楽大学卒業。同大学院修了。二期会オペラスタジオ27期生修了。オペラ研修所5期生修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーンへ留学。オペラスタジオ修了公演でカルメンを演じ特別賞受賞。

「フィガロの結婚」のケルピーノ、マルチェリーナ、「ウインザーの陽気な女房」のライヒ夫人、「蝶々夫人」のスズキ、「フルキューレ」のヴァルトラウテとロスヴァイセ、「神々の黄昏」の第2のノルン、「ラインの黄金」のフリッカ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」のサントウツァ、「リゴレット」のマッダレーナ、「修道女アンジェリカ」の公爵夫人、「ジャンニ・スキッキ」のツイータ、「ピーター・グライムス」のセドレー婦人、「アイーダ」のアムネリウス、「ドン・カルロ」のエポリ公女、二期会40周年記念原語初上演でカルメンを演じた。

ベートーヴェンの「第九」、「ミサ・ソレムニス」、ヴェルディの「レクイエム」、モーツァルトの「レクイエム」、ロッシーニの「スターバト・マーテル」、ヘンデルの「メサイヤ」、メンデルスゾーンの「エリア」、バッハの「クリスマスオラトリオ」、「口短調ミサ」、マラーの「嘆きの歌」、「千人」等にも出演。

現在、二期会、東京室内歌劇場会員、東京芸術大学講師。

井ノ上 了吏(いのうえ りょうじ)  
テノール



福岡県出身。国立音楽大学卒業。福島敬晃、饗庭知昭、中村健、アリーゴ・ポーラ、ジャチント・ブランデッリ、ジュディタ・パリス各氏に師事。

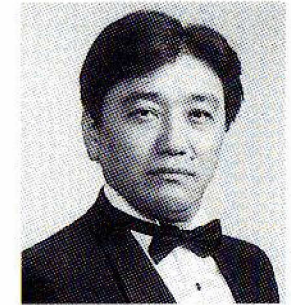
二期会オペラ「カメルン」「椿姫」「春琴」、青山芸術劇場オペラ「三つのオレンジの恋」(プロコフィエフ)、宮本亜門演出「コシ・ファン・トゥッテ」(モーツァルト)などの国内数多くのオペラに出演。1986年「東京文化会館オーディション」合格。1988年「第19回イタリア音楽コンクール」および1989年「第20回イタリア音楽コンクール」において連続2回金賞ならびにテノール大賞受賞。1988年「第24回日伊音楽コンクール」入賞。1990年「第1回日本音楽コンクール」入賞。「東京国際コンクール(民音)」音楽部門入賞ならびにルフトハンザ賞受賞。

1991年よりイタリアに活動の拠点を移し、イタリア各地でコンサートに出演。マントヴァ歌劇場、ベルガモ歌劇場に出演。1994年「イリス・アダミ・コーラテット国際音楽コンクール」入賞、「ラウリ・ヴォルピ音楽コンクール」入賞。1995年「パヴリア国際音楽コンクール」入賞。

同年イタリアより帰国後、「蝶々夫人」「ドン・ジョヴァンニ」「メリー・ウイドウ」「カヴァレリア・ルスティカーナ」、長野オリンピック文化プログラムオペラ「信濃の国・善光寺物語」などに出演。また、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団などとの、ベートーベン「第九番」、ヘンデル「メサイヤ」等の共演も数多い。

現在、東京芸術大学講師、東京コンセルヴァトワール尚美講師。二期会会員。

瀬戸口 浩(せとぐち ひろし)  
バリトン



東京芸術大学声楽科卒業、同大学院修了。安宅賞受賞、読売新人演奏会出演、第26回文化放送音楽賞受賞(声楽部門第1位)。

池端ミチ子、森園千廣、R.リッチの諸氏に師事。またG.スゼー、G.ステファーン、C.ベルゴンツイ、W.ペリー等にも国内外の講習会等で指導を受けている。

オペラでは、「フィガロの結婚」「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」「カルメン」「こうもり」「チャルダッシュの女王」「ラ・ボエーム」「蝶々夫人」「椿姫」「リゴレット」「ボッカチオ」「ジャンニ・スキッキ」等のオペラで主要な役を務めており、演奏会では、「第九」「口短調ミサ」「メサイヤ」「天地創造」「四季」「ハ短調ミサ」「森の歌」「カルミナ・ブラーナ」「子供の不思議な角笛」「レクイエム(モーツァルト、フォーレ)」等のバス・ソロを山田一雄、秋山和慶、G・ボッセ等の指揮で新日本フィル、東京交響楽団を始めとする各地の交響楽団と共演している。また、ソロコンサートの出演も多く、中でも、1996年のナポリでの演奏は絶賛を浴びた。

現在、鹿児島県立霧島国際音楽ホール(みやまコンセル)舞台技術監督、鹿児島オペラ協会会員、鹿児島混声合唱団ヴォイストレーナー。

1. 序曲「レオノーレ」第3番 ハ長調 作品72a  
ベートーヴェン
2. 交響曲第9番 二短調 作品125 「合唱付き」  
ベートーヴェン
- 第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso  
第2楽章 Molto vivace  
第3楽章 Adagio molto e cantabile  
第4楽章 FINALE

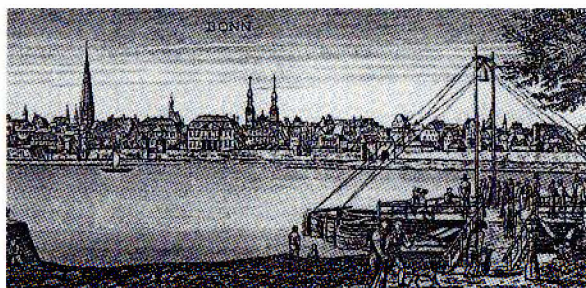


ベートーヴェンの生家(ボン)

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた「第九」の記念演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向かってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの「第九」が鳴り響く様子は、実に壮観で感動的であったに違いない、と同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持ちと愛する気持ちが手に取るようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■ シラー 《歓喜に寄す》

対訳=大宮 真琴

O Freunde, nicht diese Töne! sondern  
lasst uns angenehmere anstimmen, und  
freudenvollere.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、  
さらに快い、さらに喜びに満ちた調べを  
ともに歌おう!

Freude, schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elysium,  
Wir betreten feuer-trunken,  
Himmlische, dein Heiligtum!  
Deine Zauber binden wieder,  
Was die Mode streng geteilt;  
Alle Menschen werden Brüder,  
Wo dein sanfter Flügel weilt,

バリトン独唱・合唱

① 歓びよ、神々のうるわしい輝きよ!  
楽園の娘らよ!  
われらみな、感動に酔い、  
天の高みの神殿に踏み入ろう!  
② この世に厳しく引き離された者らを、  
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。  
御身の優しい翼の憩うところ、  
すべての者らは、同朋(はらから)となる。

Wem der grosse Wurf gelungen,  
Eines Freundes Freund zu sein,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
Mische seinen Jubel ein!  
Ja, Wer auch nur eine Seele  
Sein nennt auf dem Erdenrund!  
Und wer's nie gekonnt, der stehle  
Weinend sich aus diesem Bund!

四重唱・合唱

③ 大いなる天の賜物をうけた者らよ、  
真空の友情をかち得た者らよ、  
女の優しい愛を得た者らよ、  
歓びの歌を、ともに歌え!  
④ しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも  
地上の友と呼べる者を持つことができるならば!  
だが、それさえ持つことのできなかつた物は、  
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい!

Freude trinken alle Wesen  
An den Brüsten der Natur;  
Alle Guten, alle Bösen  
Folgen ihrer Rosenspur.  
Küsse gab sie uns und Reben,  
Eien Freund, geprüft im Tod;  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
Und der Cherub steht vor Gott.

四重唱・合唱

⑤ すべてこの世に在るものら、  
自然の胸から歓びを飲み、  
すべての善人も、すべての悪人も、  
歓びの薔薇の小径を行く。  
⑥ 歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、  
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、  
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、  
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
Durch des Himmels prächt'gen Plan,  
Laufet, Brüder, eure Bahn,  
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

テノール独唱・男声合唱

⑦ 歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、  
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、  
⑧ 同朋(はらから)よ、おのれの道をすすめ、  
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

Seid umschlungen Millionen!  
Diesen Kuss der ganzen Welt!  
Brüder über'm Sternenzelt  
Muss ein lieber Vater wohnen.  
Ih' stürzt nieder, Millionen?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt?  
Such' ihn über'm Sternenzelt!  
Über Sternen muss er wohnen.

合唱

⑨ たがいにとり手をとり合おう、億万の人々よ!  
この口づけを、全世界にあたえよう!  
同朋(はらから)よ、星のあなたには、  
愛する一人の御父が住み給うのだ。  
⑩ ひれ伏して祈るか? 億万の人々よ。  
創り主を心に感ずるか? 世界の民よ。  
星空のあなたに、主をさがし求めよう!  
星たちのうえに、主は住み給うのだ!

1. 序曲「レオノーレ」第3番 ハ長調 Op. 72a  
ベートーヴェン

ベートーヴェン(1770-1827)にとって歌劇「フィデリオ」は、生涯の中で作曲した唯一のオペラであり、まさに心血を注いだ作品である。そして、このオペラの1805年のアン・デア・ウィーン劇場における初演以来、今日の形になるまで上演されるたびに何度も改訂された。ひとつの曲が満足のいくまで何回となく手が加えられる例は、ベートーヴェンに限らず決して珍しいことではないが、この歌劇「フィデリオ」は、なかでもとくに入念に推敲されたもののひとつであろう。

さてこのオペラの序曲であるが、今日一般には、ベートーヴェンは、このオペラのために、都合4つの序曲を書いたということになっている。1804年～05年にかけてベートーヴェンはこのオペラを序曲の《レオノーレ第2番》と共に歌劇「レオノーレ」の名で初演した。しかし、この第1作のオペラは冗長との理由で、1806年にこれを改定し、序曲も新たに《レオノーレ第3番》として上演したが、世評は思わしくなく、1814年トライチュケが台本に手を加え歌劇「フィデリオ」と改題し、序曲も《フィデリオ序曲》を作曲してこの歌劇の最終稿が完成した。レオノーレ序曲「第1番」は成立年代を裏付ける決定的な資料はなく、総譜は作曲者の死後発見され出版された。

序曲《レオノーレ第3番》は、《第2番》の改作であるだけにオーケストレーションは一段と重みを加え、響きのよい序曲に変貌した。なお、歌劇上演の際この《第3番》はオットー・ニコライの提案によりフィナーレの前に演奏されることも多くなった。

さて、この《レオノーレ第3番》であるが、オペラの中からフロレスタンのアリアを2か所と、トランペットの信号とを使ってソナタ形式で書かれている。まず導入部は、Adagioでいきなりffで1つの音が奏された後、木管と弦楽器とが音階的に下降しppに落ち着く。クラリネットとファゴットによってフロレスタンのアリア「生涯の春の日に」が歌い出される。フルートと弦によって自由な発展のあと主部へと導かれる。

主部ではいきなりヴァイオリンとチェロにより第1主題が提示される。これは全曲を通して縦横に活用されるものである。第2主題はフルートと第1ヴァイオリンで静かに現れる。展開部の途中でいきなり舞臺裏から大臣の到着を告げるトランペットの信号が二度ほど鳴り響く。これはオペラのなかで悪人は滅び善人が生き残ることの象徴として用いられるものである。再現部のあと、曲はプレストによる壮大なコーダに導かれる。

2. 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」  
ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に九番目の交響曲に着手した。

1793年、ポンのフィッシュエヒは、シラー夫人の手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会には、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいざい、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナート劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

(第一楽章) Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度(第三音がなく)の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃(ほうはい)として沸き起こる巨大な魂のごとく聳然(しょうぜん)たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異なって、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気持ちを持ち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題へ壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをかち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

(第二楽章) Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考える限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワグナーは「激しい喜びが、この第二楽章をはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻醉へと駆りたてられるからである……」と言っている。

(第三楽章) Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴する

ような明るく美しい第二主題は、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中で一つの頂点であり、ワグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のほげしい促しを、やわらかい憂鬱(ゆううつ)な感覚へと溶けさせていくことか、思い出がときに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる……」と言っている。

(第四楽章) Finale

第1呈示部=まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現れる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返ししながら全合奏に至る。

第2呈示部=この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部=やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中の一つのクライマックスを形づくる。

コーダ=曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「熊本県民第九の会」実行委員会

顧問	有馬 俊一	委員	神田 一伸	黒葛原 潔
	下田 宰城		草刈 秀克	藤本 幸弘
委員長	林 原隆治		草刈 秀士	松岡 聡
			坂口 幸男	本山 洋
			田北 洋康	山崎 崇伸



〈コンサートマスター〉 鶴 和美

〈1stヴァイオリン〉	〈ヴィオラ〉	〈コントラバス〉	〈ホルン〉
内 田 衣伊子	熱 田 聡	岩 井 秀 一	奥 羽 秀 一
大 宮 伸 二	安 部 和歌葉	古 泉 俊 彦	奥 羽 朋 子
桂 敦 子	池 辺 京 子	国 米 稔	田 中 禎 子
古 泉 晃 子	緒 方 肇	白 木 信 一	梶 原 み わ
高 松 江三子	北 澤 孝 治	田 上 博 子	外 村 真実子
龍 野 珠 美	清 元 晃	中 川 裕 司	山 口 亮 二
続 宏 子	甲 田 啓 子	中 島 まゆみ	
黒葛原 契 子	黒葛原 潔	吉 田 真 紀	
鶴 和 美	徳 永 義 治		〈トランペット〉
鶴 千 春	中 村 衣井子		今 村 隆 志
長 坂 浩 子	水 田 剛	〈フルート〉	中 野 崇 之
原 雅 子	山 崎 崇 伸	〈ピッコロ〉	永 廣 正 治
松 岡 千 平	吉 田 美智子	今 村 ナオミ	堀 江 幸 司
		三 村 まどか	
		山 口 邦 子	〈トロンボーン〉
〈2ndヴァイオリン〉	〈チェロ〉		書 川 欣 也
荒 瀬 麻 理	石 垣 博 志	〈オーボエ〉	福 島 聡
井 上 朋 子	大 堀 純一郎	石 田 栄理子	米 村 宏
岡 純 子	佐無田 護	片 岡 久 哉	
北 山 尚 子	槌 田 博 文	辰 野 裕 昭	〈打楽器〉
清 田 みずほ	長 尾 和 治		白 尾 友 宏
小 柳 敦 子	永 倉 照 恵	〈クラリネット〉	唯 野 佳 香
迫 田 美 和	長 坂 輝 喜	緒 方 裕 子	早 川 武 志
佐 藤 弘 美	野 島 秀 司	黒 木 健 次	山 中 美 雪
汐 月 哲 夫	深 松 真 也	原 敏 郎	
園 村 明 美	佛 淵 かつよ		〈ファゴット〉
高 木 信 雄	佛 淵 信 夫	〈コントラファゴット〉	小 田 穂 積
野 原 万友美	本 田 義 信	小 林 太 郎	高 木 群 之
幟 川 明 子	三 浦 純 子	田 村 聡 司	
東 真知子	山 中 朗 史		
古 屋 弓 子			
本 山 洋			

熊本県民第九の会演奏会記録

※は同時演奏曲

- 第1回 昭和57年12月28日(火)  
指揮 山田 一雄  
独唱 新 圭子 木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一  
※越 天 楽(雅楽).....近 衛 秀 磨(編曲)
- 第2回 昭和58年12月11日(日)  
指揮 大友 直人  
独唱 高見久美子 岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介  
※歌劇「ニルンベルグのマイスターシンガー」前奏曲.....ワーグナー
- 第3回 昭和59年12月27日(木)  
指揮 山岡 重信  
独唱 中沢 桂 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹  
※弦楽のためのアダージョ 作品11.....バーバー
- 第4回 昭和60年12月25日(木)  
指揮 フランティシエック・ファイナル  
独唱 三繩みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男  
※「レオノーレ」序曲第3番 作品72.....ベートーヴェン
- 第5回 昭和61年12月27日(火)  
指揮 荒谷 俊治  
独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 康夫  
※トッカータとフーガ 二短調.....バッハ〜ストコフスキー
- 第6回 昭和62年12月26日(土)  
指揮 安永武一郎  
独唱 中沢 桂 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信  
※「エグモント」序曲 作品84.....ベートーヴェン
- 第7回 昭和63年12月25日(日)  
指揮 安永武一郎  
独唱 三繩みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦  
※序曲「コリオラン」ハ短調 作品62.....ベートーヴェン
- 第8回 平成元年12月24日(日)  
指揮 小松 一彦  
独唱 秋山恵美子 木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三  
※「プロメテウスの創造物」序曲 作品43.....ベートーヴェン
- 第9回 平成2年12月23日(日)  
指揮 粉山 和明  
独唱 山田 綾子 木村 宏子 大野 徹也 福島 明也  
※「ロザムンデ」序曲 作品26 D.797.....シューベルト
- 第10回 平成3年12月23日(月)  
指揮 安永武一郎  
独唱 西森 由美 木村 宏子 田中 誠 宮原 昭吾  
※「エグモント」序曲 作品84.....ベートーヴェン
- 第11回 平成5年12月23日(木)  
指揮 荒谷 俊治  
独唱 河添富士子 春日 成子 小林 彰英 栗林 義信  
※歌劇「ニルンベルグのマイスターシンガー」前奏曲.....ワーグナー
- 第12回 平成6年12月25日(日)  
指揮 金 洪才  
独唱 岩永 圭子 妻鳥 純子 饗庭 知昭 勝部 太  
※「エグモント」序曲 作品84.....ベートーヴェン
- 第13回 平成7年12月24日(日)  
指揮 金 洪才  
独唱 西森 由美 妻鳥 純子 大島 博 大島 幾雄  
※モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」k.618.....モーツァルト
- 第14回 平成8年12月23日(月)  
指揮 本名 徹二  
独唱 河添富士子 妻鳥 純子 大間知 覚 瀬戸口 浩  
※カンタータ第147番より「主世、人の望みの喜びよ」BWV.147.....J.S.バッハ
- 第15回 平成9年12月21日(日)  
指揮 金 洪才  
独唱 志岐由理子 妻鳥 純子 牧川 修一 小川 裕二  
※序曲「コリオラン」ハ短調 作品62.....ベートーヴェン